



## 新疆ウイグル自治区(1997年)新疆維吾爾自治区

面積: 1,660,400平方Km(日本の約4.5倍)

人口: 17,180,800人 ウイグル人(テュルク系)46.7%、漢族38.4%、カザフ人(テュルク系)7.4%、回族(ムスリム系漢族)4.5%、その他キルギス人(テュルク系)、モンゴル人、シボ族(満州系)など

主要言語: ウイグル語、漢語

首都: ウルムチ(烏魯木齊)



### (ご報告)

#### ■第1回留学生懇話会を終えて

##### ①民族衣装で参加

第1回目のユーラシア留学生懇話会のゲストは新疆ウイグル自治区(中国)ご出身のミリアリ・ユヌスさんとサハ共和国(ロシア)ご出身のナターリヤ・ネウストロエヴァさん。お二人とも民族衣装で参加して頂いた。

##### ②ウイグルとサハはどこにあるか?

参加者に「ウイグル、サハという地名を知っていますか?」と尋ねた。ウイグルを知っている人はほとんどであったが、サハという地名を今までに一度も聞いたこともなかったという人がほとんどであった。

サハはバイカル湖の北方に位置するが、夏時間のときは日本とサハに時差がなくなる(夏季以外はサハは日本より1時間遅い)。日本と経度の差はあまりないのである。日本の8倍もの広さの面積に人口100万人が住む。冬は零下53度位であり、かつて零下72度を記録したことがある。夏は35度位まで上がるが、日本と異なり、蒸し暑くない。

一方ウイグルは中国の内陸部に位置し、時差は日本より3時間、北京より2時間遅い(なおウイグルでは新疆時間を用いているが、鉄道などは北京時間で運行される)。面積は日本の4.5倍で、人口は1700万人である。夏は40度と暑く、冬は零下20度と寒い。

##### ③多民族地域

ウイグルもサハも多民族地域である。新疆ウイグル自治区には維吾爾族(ウイグル人)、漢族、哈薩克族(カザフ人)、回族、蒙古族(モンゴル人)などが住む。ウイグル人は南疆(南ウイグル)に多く、北疆(北ウイグル)は漢人が多い。サハ共和国はサハ(ヤクート)人、ロシア人、エベンキ人、エベン人、ユカギル人、トルガン人などが住む。

##### ④ウイグル語とサハ語は兄弟

ウイグル語もサハ語もともにテュルク系の言葉であり、兄弟関係にある。ナターリヤさんがサハ語で民話を朗読するや、ミリアリさんが「カザフ語(テュルク系)みたいだ」といった。その後、ナターリヤさんにサハ語で、ミリアリさんにウイグル語で自己紹介してもらったが、一部通じたようだ。

ウイグルとサハは一見、遠いようだが、実は近い関係にある。13世紀ころ(モンゴル帝国の時代)、現在のモンゴルのあたりから北上してきたのがサハ人である。



ミリアリさん(手前)



ナターリヤさん

また、現在内モンゴル自治区で使われているモンゴル文字(縦書き)はもとはウイグルの文字であったようだ。

現在、ウイグル語はアラビア文字、サハ語はキリル文字(一部、ロシア語にはない独自の文字がある)を使っている(ソ連崩壊後、サハ語のラテン文字への切り替えが進められている)。

##### ⑤民族語の現状

新疆ウイグル自治区では漢語化の普及が進んでいる。ミリアリさんの話によれば、ミリアリさんの少年時代はウイグル人の漢語教育は中等教育以上であったが、現在は初等教育から漢語の教育が行われている。

サハ共和国ではソ連崩壊後、サハ語がロシア語とともに共和国の公用語となった。ナターリヤさんの話によれば、ソ連時代には学校でサハ語を話す教師に注意されたそうだが、現在はサハ語を自由に使用できるようになった。

##### ⑥名前

「ミリアリ・ユヌス」のミリアリは名前、ユヌスは父の名前である。ウイグル人にはいわゆる苗字はない。

「ナターリヤ・ヴィクトロヴナ・ネウストロエヴァ」は、本人の名前、父の名前(「ヴィクトロヴナ」とはヴィクトルの娘という意味)、姓の順であり、ロシア式の命名である。ナターリヤという名前はロシア語名だが、ソ連崩壊後はサハ語の名前をつける親が増えたようだ。

##### ⑦口琴の演奏を披露

ナターリヤさんにはサハの民族楽器である口琴の演奏を披露してもらった。口琴は「ホムス」といい、アイヌの「ムックリ」に近い。サハの学校教育の場では、民族音楽よりもピアノやハーモニカが中心である。

ウイグルにおいても、民族音楽よりも漢語の音楽が中心であり、愛国心を高揚させるものが多いそうである。

### ⑧中国西部開発

新疆ウイグル自治区では現在、西部開発が進められている。1998年にミリアリさんが帰郷したときは携帯電話の使用者は少なかったが、2000年に帰郷すると使用者が急増していたのに驚いたそうだ。ウルムチからトルファンまで高速道路が開通し、それまで4時間かかっていたのが、2時間に短縮された。鉄道は1999年末にカシュガルまで延伸された。このように急速に開発が進められているが、有能な人材がウイグルから沿海部（北京、上海など）へ流出するなどの問題もある。

### ⑨ウイグル、サハへの道

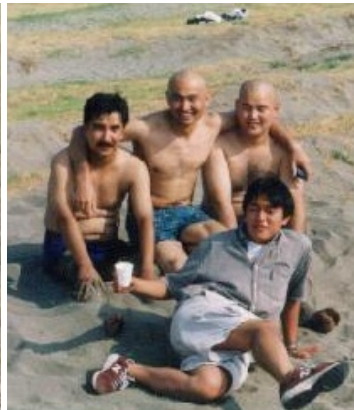
ウイグルへは、北京か上海からウルムチ行きの飛行機で行く。

サハはハバロフスクからヤクーツクまで飛行機で行く。ハバロフスクまでは新潟から飛行機がある。

(まとめ・向坂卓也)

## ■7月29日にBBQ懇親会を実施

葛西臨海公園で開かれたこの懇親会では、旧知の留学生のほか、新しい顔ぶれもあり、民族を超えたコミュニケーションを皆が楽しむことができました。当日は真夏の太陽の下、羊肉を始めとしたさまざまな食材や飲み物を囲み、民族音楽なども交えて賑やかで充実した一日と



## ●<連載>“ユーラシア文化ルネッサンス”の近況 第5回 大野遼

皆さん、小泉首相の「靖国参拝」騒動をどうご覧になっておられたでしょうか。小泉首相は、15日の「加害者発言」でバランスをとり、収束の方向に動いたようにも見える。

私は、数年前、香港返還の際、日本人の受け止め方が実に淡々としていたことや「戦後50年」を総括するなどの蝸壺的議論が横行していたことなどを思い出した。

香港割譲を思い起こせば、「自由貿易」が植民地宗主国による資源の略奪、植民地支配の錦の御旗になったことを象徴的に示すケースであった。被植民地側からすれば「自由貿易」は植民地宗主国のものであった。不平等な植民地統治、資源略奪という尻尾を引きずって、G8は、今でも残り少ないパイの取り合いをし、旧被植民地諸国が生き残りを模索することで国際政治は動いている。弱小国家や民族は、「人権」「民主主義」「民族独立」さえ、ダブルスタンダードの一部の宗主国の一方的物差しに過ぎないことはユーラシアの紛争地をみれば明らかである。人類にとっての最大の課題の一つは、多民族多文化の共生の夢を阻害しつつある「植民地統治」「近代国家」「資源独占」という、旧植民地宗主国が持ち込んだ一方的な価値観や資源独占に代わる新しい考え方や枠組みをつくることにあると思っている。

日本は、幕末には、香港割譲などの植民地宗主国の蛮行に憤る立場にあったのが、幕末明治以降、近代化＝欧化主義を植民地に陥らないための時流の選択とし、遅れてやってきた第四の植民地宗主国として蛮行もまねた。香港割譲と同じことを日本は、中国、朝鮮で行った。背伸び

して先行キリスト教植民地宗主国と競り合った。こんなことが、香港返還を淡々と受け止める日本人の姿勢や「戦後50年」を超えた歴史の総括が出来ない、忸怩たる背景になっているのではないか。これは幕末明治以降、欧化主義を選択した近代国家日本のリーダー達が行ったことではあるが、今でも、多くの日本人が、中国、朝鮮半島のみならず、ユーラシアの旧被植民地地域の民族と文化を、欧米の文化ほどには理解していないことと深い関係があると思う。「戦陣に散った御霊や戦争の犠牲者へ哀悼の誠」を捧げ、「加害者責任」を認めることだけでは済まない、日本人の半端な世界観は改善されないままなのである。近代日本の負の歴史的側面を明快に総括する時期に来ているのは明らかだ。積極的にユーラシア諸民族の理解、親睦、協力の活動を進めることがますます大事になっている。

挫折した江東区のまちづくりを支援しようという志の中で「ユーラシアンクラブシニアグループ」が誕生した。多少思い込みと激走型であることを認めざるを得ない私とユーラシアンクラブが、ゆるやかな人間関係の枠組みという理想を失わないようにするための頼りのある相談仲間だと受け止めている。道のりは遠いと思われるが、若い人たちも留学生懇話会やボイスオブユーラシアといった地道な活動を始めている。9、10月には、来年度、再来年度の事業計画を議論することになっている。この中には、ユーラシア紛争地フォーラムの立ち上げが含まれている。これらを早く軌道に乗せて、マイノリティに心配りの出来る草の根のクラブの活動を堂々と進めていきたいと思う。

## (会員からの手紙)

### ■クラブ・シニアグループが活動を開始

クラブ・スタッフである井口隆太郎、江田和、田代良子、羽田節子、福井伸彦の各氏が発起人となり、ユーラシアンクラブ・シニアグループが活動を開始しました。これは、クラブの比較的年かさのメンバーが、理解・親睦・協力を目的としたクラブの各種事業の発展・拡大に向けて側面からサポートしていこうという趣旨です。先日、かつてクラブのインターカレッジ文化講座に参加された方たち(112人)に対して、ご協力をお願いする文書を発送しました。

### ■「ボイスオブユーラシア」事業いよいよ始動

NPO法人化後のクラブの中核事業のひとつである「ボイスオブユーラシア」事業がいよいよ活動をはじめます。この事業は、ユーラシア各地の協力者(コントリビューター)との間でインターネットによる連絡網を構築して国際編集委員会を設け、ユーラシア各地の現地情報を定期的に

和文・英文による記事としてメールマガジンで発行、将来的には紙媒体による雑誌の発行を目指すものです。先日、国際編集委員会の舞台となる「ボイスオブユーラシア」専用のメーリングリストを立ち上げました。今後、各地のコントリビューター候補者への参加の呼びかけと確定、そして試験的なサンプル版の発行を予定しています。ご期待下さい。

### ■サポート会員・ボランティア会員を募集中

NPO法人化に伴い、クラブの会員規定も変更しています。年会費1万2千円によって経済的に支えていただくサポート会員と、スタッフとしての活動でクラブを盛り立ていただくボランティア会員を随時募集中です。お誘い合わせの上ぜひご入会ください。なお、このニュースレターはサポート会員の方のみに発送させていただいております。  
<登録用紙はHPIに掲載>

## (クラブ短信)

### ■クラブ・シニアグループが活動を開始

クラブ・スタッフである井口隆太郎、江田和、田代良子、羽田節子、福井伸彦の各氏が発起人となり、ユーラシアンクラブ・シニアグループが活動を開始しました。これは、クラブの比較的年かさのメンバーが、理解・親睦・協力を目的としたクラブの各種事業の発展・拡大に向けて側面からサポートしていこうという趣旨です。先日、かつてクラブのインターカレッジ文化講座に参加された方たち(112人)に対して、ご協力をお願いする文書を発送しました。

### ■「ボイスオブユーラシア」事業いよいよ始動

NPO法人化後のクラブの中核事業のひとつである「ボイスオブユーラシア」事業がいよいよ活動をはじめます。この事業は、ユーラシア各地の協力者(コントリビューター)との間でインターネットによる連絡網を構

## (他団体情報)

発行：NPO 法人ユーラシアンクラブ

発行人：大野遼 編集人：井出晃憲

2001年8月1日発行

住所：〒151-0053東京都渋谷区代々木2-13-2第1広田ビル

電話 / ファックス：03-5371-5548

E-mail : PAF02266@nifty.com

Homepages : <http://homepage1.nifty.com/EURASIANCLUB/>

**○編集後記:** 旅をする人の思いはさまざまだ。先日「ロシアの正しい楽しみ方」(「勝手にロシア通信」編集部・旅行人発行・1500円)という旅行案内書を手にした。クラブのスタッフMさんから、「カルムイクのことが出ているよ」と教えてもらったからだ。同じくスタッフのHさんは、「“正しい”なんて人それぞれ違うのに」と実物を見る前からいぶかしげだった。

さて、バックパッカーが中心となって執筆したその本のカルムイク共和国訪問のページを開いてみて愕然とした。自分がいかに不便な秘境を“探検”してきたかを自慢げに書き、国や首都の地図すらない所だと見下したスタンスだ。(地図は本当はずぐ手に入る)「本邦、いや世界初公開！」と題して掲載された手書きのエリスタの町の地図には誤記も多い。どのようなまなざしで訪問地を見るかは大切な問題だ。同じく旅を愛する者としてよい反面教師になった。

しばらく休載している「ユーラシア人物往来」は次号より必ず復活させます。



## ■ロシア極東沿海州への親睦旅行参加者募集

### ～ナナイ、ウデゲ民族理解・親睦・協力促進ツアー～

目的: 日本対岸の先住民の暮らし、文化、言語の理解を目指し、人々との親睦、協力の関係を発展させる。

趣旨: ロシア極東地域の先住民族村を訪問。自助努力の拠点となる村のコミュニティキャンプ、コミュニティセンターの完成に協力。むらづくりに取り組む村民有志と管理委員会を形成し、少数先住民族の文化理解、親睦、協力の活動を発展させる。

旅行時期: 8月17日から24日の8日間

旅行ルートと内容: 新潟空港発ハバロフスク着。車でアムール川岸辺の民族村、シカチアリャン村でホームステイ。村民や子供たちと交流。キャンプの整備協力。車でビキン川沿いのウデゲの民族村を訪問、「デルスウザーラ」ゆかりの原生林の狩猟小屋を訪ねる。

同行者: 大野 遼(ユーラシアンクラブ代表)

#### <スケジュール概要>

第一日目: 8月17日(金)新潟ーハバロフスク。空港からシカチアリャン村へ直行。

第二日目: 8月18日(土)シカチアリャン村小学校訪問。ナナイ語学習。博物館見学。民族芸能鑑賞。ペトログリフ見学。

第三日目: 8月19日(日)ボートでアムール川遊覧、中州でバーベキュー、釣り。

第四日目: 8月20日(月)シカチアリャン村からクラスニーヤル村へ移動。

第五日目: 8月21日(火)クラスニーヤル村小学校訪問。ウデゲ語学習。狩猟組合訪問、村民との交流会。

第六日目: 8月22日(水)ビキン川遡上。猟師小屋で一泊。

第七日目: 8月23日(木)夕方シカチアリャン村に移動、シカチアリャン泊。

第八日目: 8月24日(金)ハバロフスクー新潟

注意:

現地での事情でスケジュールが変わることがあります。

必ず寝袋、野外トレッキングに必要な装備、その他釣り具、双眼

鏡、医薬品、トイレトペーパー、ヤッケ等防寒具、防虫

ネット等ご用意ください。

旅行費用と開催条件: 一人15万円(ビザ代別)。10人。

振込先: 第一勧業銀行虎ノ門支店

普通1778313 ユーラシアンクラブオオノリョウ

旅行主催: トラベル世界

旅行企画: 特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ

## ■少数民族村の自立支援で「コミュニティキャンプ/センターサポート委員会」が発足

以前のニュースレター4月号で、ロシア極東沿海州のクラスニーヤル村の住民主体の民族文化産業再生拠点「ウデゲ・コミュニティセンター」を創設する事業のために、国際開発救援財団に申請していた件と、シカチアリヤン村のコミュニティキャンプ整備補修事業のために財団法人地球市民財団に申請していた件、ふたつの助成金申請がともに却下されたことをご報告しました。さらに5月号で、これらふたつの事業についてクラブが独自に委員会を立ち上げて推進していく旨ご報告しました。先日いよいよ少数民族の自立支援のために「コミュニティキャンプ/センターサポート委員会」が発足いたしましたのでお知らせいたします。



## 1, 極東先住民村シカチアリのコミュニティキャンプ整備補修事業

目的:ロシア共和国ハバロフスク地方ハバロフスク区シカチアリ村に所在するコミュニティキャンプ(約2ヘクタール)を、先住民ナナイを始めとする極東少数民族の文化伝承とシカチアリ村の福祉、産業開発の拠点となるコミュニティキャンプとして活用するため、シカチアリ村役場およびシカチアリ村事業組合、シカチアリ村初等中等学校および住民有志で構成する「シカチアリコミュニティキャンプ管理運営委員会」が管理運営するに際し、可能な協力方法等を協議実施することを目的とする。

事業費総額:741,428円

(内訳:建物修理材料393,428円、揚水ポンプ300,000円、作業労賃48,000円)

別紙でご報告したとおり「江東区下町ユーラシア文化ルネッサンス事業」が挫折、事業の修正を行うことになった。事業の提案にある考え方が間違っているとか、悪いというものではなく、あくまでも江東区地域振興会の内部事情によるものである。今後は、深川仏教会や日本民謡協会、その他との話し合い、協力を進め、民間ベースで、事業実施の基礎体力を養いながら、大いに事業を再構築したいと思う。

そこで今回は、私がなぜ「江東区」に事業を提案したかという点について、少し書いて置くことにした。私は、かつて北方ユーラシア学会の事務局長として、中山外相とゴルバチョフ書記長(いずれも当時)が会談した際に交わした政府間交換公文書で決まった「パジリク王墓発掘」事業の日本側事務局長を務め、日本から百人ほどの学者や発掘機材を届け調査をしたことがあり、またウラジオストク南部の豆満江河口近くにある渤海土城調査を進めたことがある。それらの活動を通して、歴史考古学的にユーラシアは、旧石器の昔から江戸時代まで、環日本海交流の多くの証拠が挙げられ、まさに日本列島は「ユーラシア大陸に開けたパラボラアンテナである」と語れるようになった。シルクロード、朝鮮半島経由の仏教文化、シャーマニズム、騎馬文化だけでなく、北方ルート多くの交流があったことは、百回を超える文化講座シリーズでその一端を紹介できたつもりだ。

幕末明治以降、ロシア及びソ連の時代になって、北陸から新潟、北海道にいたる日本海側が、西欧中心の表日本文化が喧伝される一方で「裏日本」と呼ばれ、ほそぼそとユーラシア情報を蓄積してきた。その中心に新潟があり、「環日本海経済交流圏研究会」などの先駆的な活動も生まれた。1980年代にそうした団体のリーダーとの交流も持ち、新潟が東京へのユーラシア情報の発信拠点になると考えていた。そうこうするうち旧ソ連が崩壊、私はソ連時代に訪ねたエベンキ、ユカギール、ナナイ、ブリヤートなどシベリアの少数民族の人々を念頭にボランティア暮しに入った。交流の活動軸として、新潟—東京を考えるというのは、ユーラシアンクラブ設立当初からの発想の一つだった。新潟で「ユーラシアコミュニケーションフェスin小出」を3年間実施したり、群馬で「ユーラシア文化村」を提案したり、今回「江東区下町ユーラシア文化ルネッサンス」を提案したのも、ユーラシアを視野に入れたまちづくりが地域や日本の文化再生に適うという信念からである。「個人の思惑」「組織内部の事情」など事業の進展は順調とはいかないものの、確実に「ユーラシア文化ルネッサンス」の土壌は広がってきつつあると言える時代の変化が見えるようになってきている。

「ユーラシア外交」を掲げた政界、経済界に続いて、音楽指導要領まで「ユーラシアを視野に伝統文化を見直す」と打ち出した。詳しい内容は、皆様にお届けした「各位へ」という企画書に書いた。芸術文化のまちづくりについては、昨年6月、超党派の国会議員連盟「音議連」が芸術文化振興法を今後の最大課題と決定しており、すでに一部の政党が先走り始めるなど、少なくとも音楽文化を視野に入れた芸術文化のユーラシア文化ルネッサンスは時代の趨勢になる形成なのである。新潟以来努力してきたコンセプトの骨格は明快になっており、「組織の内部事情で挫折」という事情にもかかわらず、ユーラシア文化ルネッサンスの方向は変える訳にはいかないのである。また日本の音楽文化を育んだ「社寺文化」を日本文化の特色の一つとすると、江東区が日本の伝統的文化及びユーラシア文化の時空を超えた終着駅であって、新しい文化の始発駅になるという文化のまちづくりのコンセプトも変える訳にはいかない。切にご理解をお願いしたい。



